

# 商工ジャーナル

SHOKO JOURNAL

12  
DECEMBER

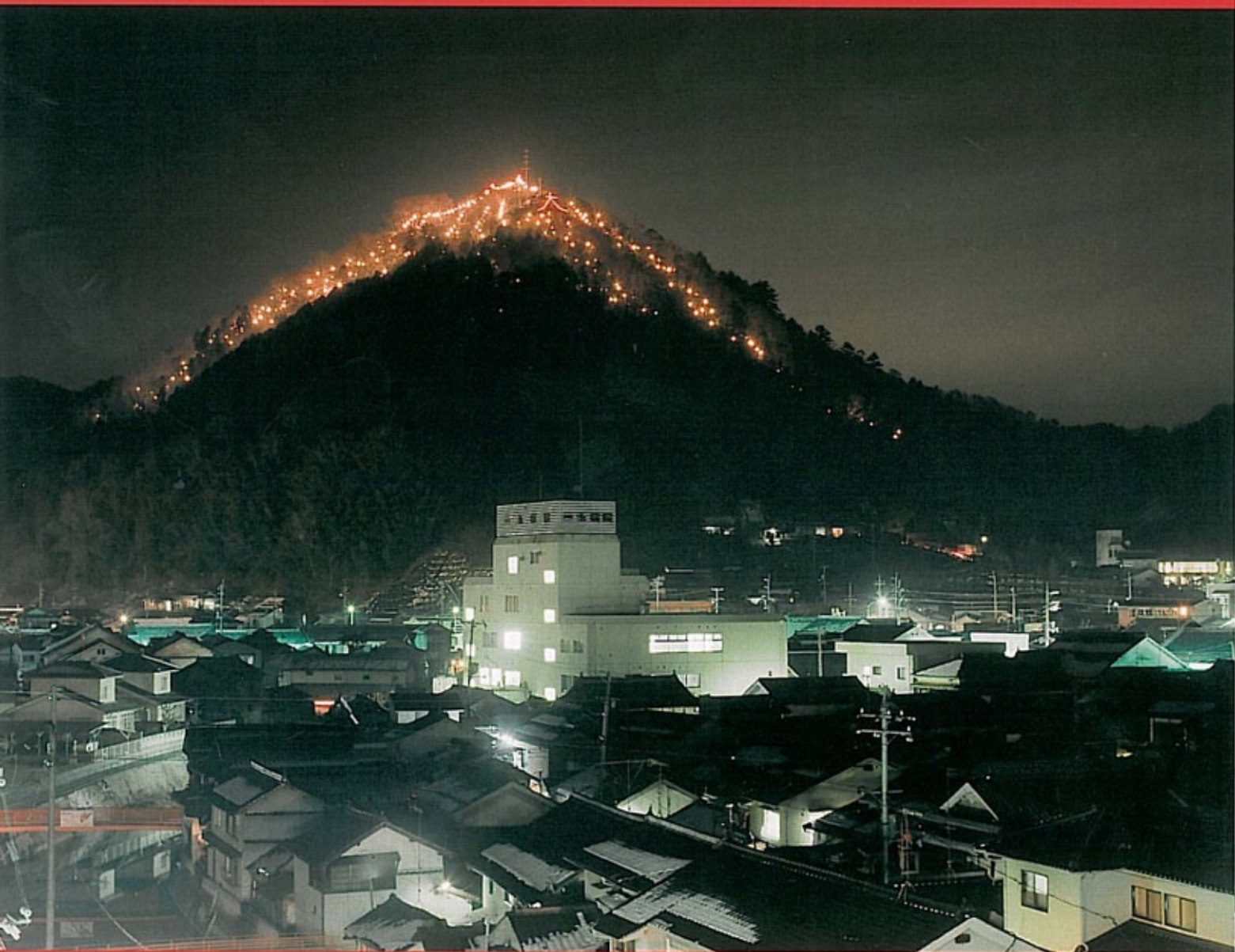
2008

特集

## 農業を魅力あるビジネスに

今を語る 小柴昌俊氏「幸運な人類の存在を思えば」

テクノロマン・インタビュー 世界の水不足を救え! 本格化する人工降雨の研究



# ハシモト教授の ものづくり 見てある記



政策研究大学院大学教授

橋本久義

## ゴルフの飛距離が 伸びるソックス

北京五輪ではスピード社の水着を着た選手が次々と新記録を生み出した。従来は体の動きを拘束しないように、ピツタリではあるが伸縮性を持たせるのが常識だった。しかしスピード社は伸縮性のない布でギリギリと体を締め上げる方法をとった。

一人一人の体に合わせてオーダーメイドになる。着るのにも数十分かかるらしい。

日本のメーカーはこういう「体型を変化させてしまうようなやり方」はルール違反ではないかと思っただけで遅れたというが、次回ロンドン五輪は少し違った様子になるだろう。いずれにせよ、水着の機能によって水泳の記録がこれだけ変わるということには驚いた。

ところで、あるソックスを履くとゴルフの飛距離が伸びるという話がある。大阪府松原市のコーマ(株)が開発したC W・Xという3Dソックスだ。

通常のソックスは爪先からふくらはぎまで「同じ直径」で編み上げて、ずり落ちないように上部をゴム入り糸で締めている。ところが足の形は凸凹で複雑だから、長時間履いていると指の部分やふくらはぎが圧迫されて痒くなったりする。血行が悪くなっているためだ。

ところがC W・Xは親指の付け根などは形状に合わせて太く編み、土踏まずの部分は締めてアーチ型を維持させ、足首サポートで足首部の生地のもたつきやズレを防ぎ、またふくらはぎの部分は段階的に締めて、ずり落ちないようにしている。長時間履いても足が鬱血しないため、

疲れず健康にも良いという。

また、足にフィットするためスポーツの成績が上がる。私の友人がこの靴下を履いてゴルフをしたら、普段一〇〇ぐらいのスコアが、九四で回れたし、ドラコンで優勝したと喜んでた。たかがソックス。されどソックス。全国のゴルフコースやデパートでの販売は好調だという。

## 大正時代から 靴下を製造

コーマは一九二二(大正十一年)年、吉村盛善社長の祖父の吉村駒三氏が創業した。

そもそも松原・布施辺りは河内木綿の一大産地。駒三氏の生家はこの辺りの有力木綿問屋で、非常に羽振りが良かったらしい。駒三氏は大正年間にサンフランシスコに渡航しているくらいだから大変な資産家だっただろう。当時は船で、片道四十日ほどかかり、現在価値で三千万円ほどの渡航費が必要だった。

しかし、駒三氏は独立に際し、手織木綿は大紡績企業と競争できなくなると考え、鐘紡の工場

# 逆境を跳ね返す3D靴下の開発

コーマ(株)

吉村盛善社長

から英国製靴下編機械を譲り受けて靴下に特化して製造を始めた。当時は紡績女工さんが、和服から洋装に変わる時でもあり、黒のストッキングは時流に乗って売れに売れた。

戦後は衣料品の統制下で細々と自家用の靴下を作っていたが、そろそろ統制も解除されようかという一九四九年に展示会でゴム入り靴下編機を見て、大量に購入した。案の定、五〇年に統制が解除され、その翌年、吉村駒三商店として本格的に靴下に取り組み始める。

染色設備も入れた。染工程は設備投資が多額で、規制が厳しかったため、専門工場に任せるのが常識だったが、時間がかかっていた。自社設備があれば、ごく少量の染色もできるし、新しい



吉村盛善社長

染色方法も研究できる。ここが同社の強みとなる。他社は直接染料で染めていたが、同社の染めは天然染料を反応させて発色させるやり方で、色が鮮やかで評判が良く、一世を風靡した。

ブランドはコーマ印。短い繊維を除去して作る糸（コーマ）と駒三のコーマから名前をとった。昭和三十年代にナイロンの時代になったのだが、綿にこだわりの、ナイロンに負けないよう織り方を工夫した。縦糸を二本組にして角度を付けて張る。すると、一方が上で、一方が下になる。

プレレーティングという、その方法で赤糸と青糸を編み込むと玉虫色に透けてしゃれた味になる。またナイロン並みに伸縮性を持たせる綿織法も開発した。しかし、開発したからといって、売れるとは限らない。そこ

がつかいどころだ。ナイロンの売れ行きを指を咥えて眺めることになった。

非常に苦しんでいた頃、駒三氏が他界し、吉村武氏（現社長の父）が後を継いだ。

一九六三年に心機一転を期し社名をコーマ株式会社に変更した

りから風向きが変わる。六〇年代後半になってくると、D社がスポーツウエアに、デザインと機能性を持ち込んだ。だぶだぶの作業衣のズボンのようだったスキーウエアはストレッチの入ったスマートなものになり、これがスキーブームの波にも乗って急成長。その会社がコーマのソックスを「これはいい。むれない綿なのにこんなにフィットする」と、どんどん買ってくれた。これで売れる心配をしなくて良くなり、収益も上がった。

ところがバブル崩壊頃から事情は一転、ポーターレスの価格競争が始まる。品質対価格なら負けないのだが……。昔は大阪だけでも百社以上の靴下メーカーがあつたが、今は十社前後。実際に大阪で靴下を編んでいるところは、三社しかない。

### 編機から自前で作る

二〇〇三年に一念発起した。コーマが元氣なのは開発している時だ。その後開発品が消費者に気に入られ、ちよつと時間差

があつて忙しくなる。だから、こういう時こそ開発だ!! と全力で取り組んだ。

そうして開発したのが3Dソックスだ。自慢は編機を自社で作ったことだ。一台の機械で、いろいろな編み方をしなければならぬ。機械屋さんには作れないわけでもないだろうが、生地がきれいに出不ない。同社はもともと工作機械を持っていて、機械を自分で改造していたから、自分で特殊な靴下編機を作り上げることができた。特許にし、国際出願もした。足の感覚を大事にするサッカーでも、このソックスを練習に愛用しているプロ選手がいる。

さらに、長時間スポーツ用の靴下も開発した。こちらも特許を出す準備をしている。「これからは健康を狙って、付加価値の高い製品を開発し続ける」と吉村社長は意気軒昂だ。

### ●コーマ株式会社

大阪府松原市阿保三二一六二七

☎0723-32-1563

http://www.cooma.co.jp/